

十地經における jhāna-bhūmi について

伊 藤 瑞 叡

一 問題の所在

十地經の十地の教説中に見出される特異な用語に jhāna-bhūmi なる成語がある。この成語は華嚴經大本中いくつかの章品にも既成用語として散見される。⁽¹⁾しかし勿論その意義および用法については十地を説示する十地經において標準的性格が与えられているように思われる。ところでこの成語は十地經にあつてその意義と用法において必ずしも一様でなく、むしろいくつかの側面を有している。したがつてこゝでは十地經におけるその成語の意義を考察しながら、多少の関連問題を共に究明したいと思う。かくして jhāna-bhūmi なる成語が見られる諸用例を摘出し整理すると、その用法意義などにより次の如く分類考察すべきものと思われる。

二 十菩薩地 (daśa bodhisattva-bhūmayāṇ) を総称する場合

十地經における jhāna-bhūmi について (伊 藤)

さて第一に同經の Skt. 原典に欠く Nidāna-parivarta No. 21 の重説偈後半の Tib. 訳に「しかし観なく智なく行なくして、識の境 (vijñāna-viśaya) に随つて義を知ることのないものは、聞いても信ぜず直ちに惡趣に墮ちるだらう。かれらを憐愍する故に智地 (ye śes sa || jhāna-bhūmi) を説かない」⁽²⁾とある。この中、jhāna-bhūmi なる成語に相当する語はシナ訳諸本に欠くが、同經最古のシナ訳本「漸」には慧住地と見えるから、この文面に本来あるべき成語として承認しえよう。第二に続いて Nidāna-p. No. 22 に諸訳大体一致して「……いざそれを演説したまえ。如来の威力によつてかくの如きこれら不可思議の住処 (|| 十菩薩地) もよく守護され信受されることにならう。……この地の説示 (bhūmi-niḍḍesa, sa śin tu bstan pa) が説かれるとき……一切の菩薩もまさにこの智地 (jhāna-bhūmi, ye śes kyi sa) を守護するために精勤に入るからである」とあり jhāna-bhūmi なる成語が見られる。⁽³⁾第三に Skt. 原典 Nidāna-p. No. 28 の讚請頌の一部に

「(仏の) 威力によつて……勝れた妙なる行、智地 (jhāna-bhūmi, sa yi ye sēs) を分別 (prabheda, nam phye) して開示したまえ」とあつて、やはり jhāna-bhūmi なる成語が見られる。諸訳間に少しく異同はあるが、これに相当する語はすべてに見られる。ただ「住」「六」にのみ諸地と訳され十地 (dāsa-bhūmi) 各々を総称するものと解されている。

さて以上の中、第一の文面は説者・金剛藏菩薩が十菩薩地 (dāsa bodhisatva-bhūmayah) の名称 (nāma-dheya) のみを説きその内容を分別して説示 (nirdeśa) しないことの理由を示す経文の一部である。また第二、第三の文面は問者・解脱月菩薩が十菩薩地の説示を請うことを示す経文の一部である。したがつてこの場合における jhāna-bhūmi なる成語は十菩薩地を総称し、かつまた十地の各々をも指摘しうるものであると知られよう。

しからばその論理的理由は如何というに、それは jhāna-bhūmi なる合成語を構成してゐる jhāna なる語と bhūmi なる語との同経における意義上の基本的關係に求められるべきであろう。ところでそういう關係は殆んど jhāna を文脈上の主要語とすることによつて dāsa-bhūmi または bhūmi を解説しようとする文面中に見出される。そしてそれらの文面を整理すると、大約して次の如くいえる。すなわち dāsa-bhūmayah は仏智 (buddha-jhāna) を根源的事実としての主

体となし、一切智性より生起したものの (sarvajñatā-sambhūtaḥ) であり、一切の行相において一切智々 (＝仏智) に随行するもの (sarvajña-jñānānugatāḥ) である。また bhūmi は智の起すところ (jñānābhinihāra) にして智に趣入するもの (jñāna-praveśa) であり、智 (jhāna) の生処 (ākara) あるいは一切智々の功德 (sarvajña-jhāna-guṇa) の生処にして自然智を達成せしめるもの (svayambhū-jñānādhigamata) である。すなわち経文の趣意によれば、bhūmi はこのような意味において jhāna に基本的關係を有していると考えられる。したがつて jhāna-bhūmi という二語併記の合成語は bhūmi の jhāna に対するこのような關係を含蓄しているものといえよう。jhāna-bhūmi が十菩薩地を総称し、また十地の各々も指示しうるものとして使用せられている論理的根拠は、恐らくこの点に求めることが許されよう。

三 第八菩薩地 (aṣṭami bodhisatva-bhūmi) を指示する場合

さて十地の中では殊に第八地のみが jhāna-bhūmi と呼称されている。その呼称が有功用性とされる前七地に対して無功用性とされる第八地の特定意義に関連していることは容易に察せられよう。しかし第八地は何故に jhāna-bhūmi と称されるのか、その意義は何か、またその場合の jhāna と

は如何なるものか、について知るにもその点を留意する必要がある。

先ず第七地の重説偈の一部にシナ訳〔八〕「地」を除いて諸訳一致して「第八地の智地に到るならば、その時、心の境界を超え智の業 (jñāna-karman, ye śes las) に住する」とある⁽⁹⁾。また第八地の重説偈の一部にシナ訳〔八〕「地」を除いて諸訳一致して「かれら牛王は最勝の智地を得て……智に入るに到る (jñāna-praveś'upagata, ye śes shugs dan ldan)」云々とある⁽¹⁰⁾。そして後者の重説偈に対応し、しかも前者の重説偈にも意義上共通性を有する第八地の長行 (No. 16) には、「第八地において菩薩が「智の無功用性 (jñānānābhogata) によつて一切智々に入る」のに殊勝である旨が説示されている⁽¹¹⁾。この中、jñānānābhogata という合成語は属格の tapu = ruṣa とつて理解し jñāna を sarvajña-jñāna と解釈する⁽¹²⁾。詳しくは「一切智々の根本的属性たる無功用性」を表示していると考えられよう。しかも Tib. 訳と〔漸〕以外のシナ訳諸本とに「無功用 (を本質とする) 智 (hun gyis sgrub pa; ye śes)」と訳されていることを考慮すると、この合成語は何らかの智を示しているとして捉える観点からは、「無功用を本質とする智」をも表示しえていると解することができよう。また「一切智々に入る」というのは諸訳を検討してみると「一切智々を正しく捉え (yan dag par gnou pa) それに能く近づく

ク」という程度の意味を示すものと解するのが妥当であるように思われる。

以上の三用例を比較照応せしめ合理的に整合してその論理的構造に着目すると、第八地は「菩薩が jñāna (= jñānānābhogata)-karman (一切智々の根本的属性たる無功用を本質とする智の作用) に住することによつて sarvajña-jñāna (一切智々) を正しく捉えそれに能く近づくこと」の bhūmi であるという意味で、jñāna-bhūmi と称されづゝるのじはないかとの推測が可能となる。

あるいは第八地の十種の異名を列举する文面 (No. 25) 中に諸訳一致して「これが菩薩の第八の智地であり、智の不退であること (jñānāvīryatva, ye śes mi bzlog pa) の故に不退地と名けられる……智による決択のよくなされたこと (sukṭa-jñāna-vicayatva, ye śes kyis rnam par dbye ba śin tu phyé ba) の故に究竟地と名けられる」とあることから、jñāna-bhūmi とは「jñāna が不退びある bhūmi」[jñāna による決択がよくなされた bhūmi] という意味を担ひつゝることも考えられよう。

ところで第八地を指摘する場合の jñāna-bhūmi の jñāna とは、以上の諸点からして第八地で完成の域に達しているものと見るのがほぼ妥当であろう。しかも第八地の経文中、上述の長行 (No. 16) の広説と看做しうる長行の一部 (No. 26,

22) に「この菩薩はかくの如き智 (evam-jhāna) をよく成就し仏の種性に随行する」云々と、また「彼はかくの如き智地に達し大乘のマンダラに随入する」云々とあるが、こゝで前者の *evam-jhāna* の *jhāna* と後者の *jhāna-bhūmi* の *jhāna* とはコンテキストからして同一のものと考えられるから、第八地を指摘する場合の *jhāna-bhūmi* の *jhāna* とは第八地でよく成就されうるものでなければならぬ。したがって *jhāna-bhūmi* の *jhāna* とは *sarvajña-jhāna* をではなく、*jñānānābhogata* なる合成語によつて表示されている「一切智々の根本的属性たる無功用を本質とする智」を指摘している⁽²²⁾と推定されよう。

しかも上記文面中の *evam-jhāna* の *evam* は先行文面の内容を総括的に指摘し、それを *jhāna* という觀念に統一しようとする意義を担うものといえよう。そしてその先行文面はその構造上の論理的連関を考察し体系的に整理してみると、まさしく「無功用を本質とする智」の内容を広説しているものと理解することができる⁽²³⁾。すなわち考察の結果を要略するならば、「無功用を本質とする智」とは「善巧なる方便の智 (*upāya-kauśalya-jhāna*) にて成就される無功用 (*anābhoga*) から生じた大なる菩薩の覚慧 (*buddhi*) によつて、一切智々を伺察 (*vi-car-aya*) し三界を伺察する智 (*traiḍhātuka-vicāra-jhāna*) や身に関する智 (*kāya-jhāna*) を得つて、菩薩の

自在性 (*vasitā*) を具え不可思議智 (*acintya-jhāna*) を具有せしめ、しかして一切の仏法を撰集するために過失のない (*a-navadya*) 心・口・意の業を起す」ところのものであると、あるいは換言すると「大なる精進 (*maha-vīrya*) の発動を得るも一切の功用 (*sarvābhoga*) を捨て一切の分別 (*vikalpa*) を離れて、しかも本願力 (*pūrya-praṇidhāna-bala*) の任持に住する故に般涅槃 (*parinivāṇa*) とならないように一切智々を分別して、一切智々を成就する無量となる身・口・意の業を成就する」ところのものであると推知される。

また第六地の経文の長行 (No. 22) の一部に諸訳一致して「智地に趣向し、声聞・独覚の地 (*śrāvaka-pratyekabuddha-bhūmayāḥ, ān tños dan ran saṃs rgyas kyi sa*) から転離し、仏智の現前する状態 (*buddha-jñānābhimukhata, saṃs rgyas kyi ye śes mion tu bya ba*) に決定する」とあつて、*jhāna-bhūmi* が声聞、独覚の地に対峙されているが、こゝで仏智の現前する状態が第六地の内容を示しているから、*jhāna-bhūmi* とは第六地に上位するものであることは明らかであろう。あるいはまた第七地の経文の長行の一部 (No. 15) に諸訳大体に一致して「声聞、独覚の地を超過し、般若と智による伺察の地 (*prajñā-jhāna-vicāraṇa-bhūmi, śes rab dan ye śes kyi rnam par dpyod paḥ sa*) を現前する」とある⁽²⁴⁾。この場合の「般若と智による伺察の地を現前する」と

は何を意味するか不明であるが、ADVによると「第八地に近づく」ことを意味するという。⁽¹⁵⁾そして「第八地においては止 (samatha)・観 (vipaśyanā) の道 (marga) の成就があり、伺察 (vicāraṇa) のみに尽きる」と解されている。この理解は先に推知された「無功用を本質とする智」の内容・作用に照応しているから適正なものであると考えられる。しかして恐らくこの二用例において声聞独覺の地に對峙する形で示される jhāna-bhūmi もまた第八地を指摘しているものと解しえよう。

四 仏地 (Buddha-bhūmi) を指示する場合

さて、第一地の經文において菩薩が第一地に住して歡喜 (pramodya) を生ずるその理由を述べる長行 (No. 7) の一部に諸訳一致して jhāna-bhūmi が凡夫地 (bāla-prihag-jāna-bhūmi, byis paḥi sa) に對峙されている。⁽¹⁶⁾すなわちその文面では第一地につ凡夫地から遠離して jhāna-bhūmi に近づくことが述べられている。しかもこの場合に jhāna-bhūmi は仏地 (Buddha-bhūmi) という成語⁽¹⁷⁾に、また凡夫地は一切の世間の境界 (sarva-jagad-viśaya, byro ba thams cad kyi yul) という語句に照応している。したがってここから jhāna-bhūmi とは十地を總稱するものではなく、buddha-bhūmi を指摘しうるものと解することが許されよう。

十地經における jhāna-bhūmi についても (伊 藤)

ここから buddha-bhūmi はそれとシノニムである tathāgata-bhūmi なる成語が声聞乘・獨覺乘・菩薩乘に對準されたり、また不共佛法 (avenika-buddha-dharma) 乃至無量 (智) (apramāṇa-jhāna) に達せる如来の行境 (tathāgata-gocara) を總稱する位置にあつたり、法雲菩薩地に對比する形で呈示されて「無量智を有する (apramāṇa-jñānin) 如来の法性 (dharmatā)」なる語句に照応していたりなどするから、十地上位するもので直接的には如来の境地を示すものであることは明らかであろう。

したがって buddha-bhūmi を指摘する場合の jhāna-bhūmi の jhāna とは何かどうに、同經において buddha-bhūmi とシノニムであると看做しうる一切智 (者) の地 (sarvajña-bhūmi, thams cad mkhyen pa ḥid kyi sa) という成語が見出され、⁽¹⁸⁾しかも十地が十地以上の平面として根源的に志向關係をもつところのものが仏智 (Buddha-jñāna) あるいは一切智性 (sarvajñatā) すなわち一切智々 (sarvajña-jñāna) と呼ばれているから、一往 sarvajña-jhāna と見ることが穩當であろう。

また一切法を安立せしめる主体の意義を担うものとして大智の地 (mahā-jhāna-bhūmi) なる成語が見られるが、これも jhāna-bhūmi の異名であり、したがって jhāna とはそういう意味での mahā-jhāna とも解しえよう。さらにまた大無

礙智の地 (mahā-pratisamvid-bhūmi, tha dad pa yan dag pa chen po hi sa) なる成語が見られるが、この場合の mahā-pratisamvid は pratisamvid が第九地の行目であるのに対して、'buddha-jñāna の能動的側面（＝理解・表現の能力）を表現するものとして採用されたものであろうから、jñāna の内容の一面を意味するものとも考えられよう。

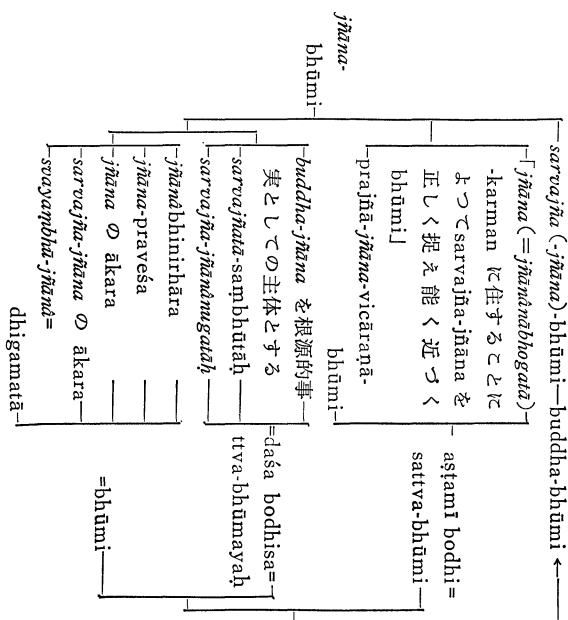
他に大般涅槃の地 (mahā-nirvāṇa-bhūmi) なる成語が見られるが、これは菩薩の十相示現の第十の位相であり、成正覺 (abhisambodhi) ではなく無余依涅槃としての命終を意味するから、jñāna-bhūmi の異名と見るべきものではない。

なお Śā. 原典 Nidāna-p. No. 14 に「諸の菩薩が過去…
未來…現在の諸仏世尊の智地に入るときには、十菩薩地が諸
仏世尊の智に入る (‘eva-tar-a-ni) 」とあり、シナ訳最古本の
〔漸〕もこれに順する。他の諸訳は文意を少しく異にし、十
菩薩地が智地と称されているが、趣意が不明瞭となるから
Sk. 原文の方が適正であると看做しえよう。したがって Bu =
dha-bhūmi を指摘する場合の jñāna-bhūmi とは daśa bo-
dhisattva-bhūmayāṇa にとつてはその証入するところである
と解せられよう。

五 結 論

以上の論究において解明されたところを簡潔に要約し図式

的に示して結論としよう。



1 シナ訳八十卷本および Dh. 訳を通覧しただけで *phāna*
bhumi の訳語と思われる智地 (*ye śeś sa*) なる語は如來現相
品 (國語華嚴部 Vol. 1, p. 102, l. 11; Pk., Vol. 25, 88a, l.
7^c) 毘盧遮那品 (p. 178, l. 10; 167a, l. 3^c) 十住品 (p. 338,
l. 17; p. 145, 88b, l. 3; *ye śeś śin tu zaḥ paḥi sa*)⁺ 廻
向品 (Vol. 2, p. 43, l. 12; 150a, l. 1: *hṛgaṇs paḥi sa?*;

十地經に於ける jñāna-bhūmi との關係 (中 藤)

句を欠へ。

- 11 Rd., p. 67, l. 10~l. 19; Pk., 124b, l. 8~125a, l. 5; 正藏' Vol. 10, 483a; 521b; Vol. 9, 565a; Vol. 10, 199c; 560a. 原文中 Rd. 本には sarvajña-jñānenākramati とあるが Ko. 本 (p. 136, l. 6) は sarvajña-jñānam ākramati とある諸訳をたゞし後者と同一とする Ko. 本に従つて理解する。
- 12 Rd., p. 71, l. 11~l. 15; Pk., 130a, l. 1~l. 4; 正藏' Vol. 10, 483a; 522b; Vol. 9, 566a; Vol. 10, 561b; 200c.
- 13 Rd., p. 71, l. 18, l. 26; Pk., 130a, l. 5, 130b, l. 2. したが後文に於て Tib. 訳は jñāna を欠きシテ訳 [漸] [住] [六] とは bhūmi を欠へ。 [入] [地] とは相當語な。
- 14 拙論「第八地のごとく」(未公表) 参照。
- 15 Rd., p. 53, l. 16~l. 18; Pk., 107a, l. 1~l. 2; 正藏' 477a; 515c; 195a; 555a.
- 16 Rd., p. 60, l. 7~l. 8; Pk., 116a, l. 2~l. 4; 正藏' 480a; 518c; 197b; 557b.
- 17 Pk., Vol. 104, p. 111, 272b, l. 1~l. 4.
- 18 Rd., p. 12, l. 18~l. 23; Pk., 59a, 13~l. 7; 正藏' Vol. 10, 461c; 500c; 181b; 538b. jñāna-bhūmi と [漸] とのち道場とある。
- 19 buddha-bhūmi と [漸] [住] [六] と公平等と Tib. 訳は [入] [地] とある。
- 20 Rd., p. 76, l. 11~l. 14; Pk., 138b, l. 1~l. 3; 正藏' Vol. 10, 486c; 525b; Vol. 9, 568c; Vol. 10, 202c; 564b. Rd., p.

17, l. 13~l. 21; Pk., 63a, l. 2~64b, l. 2; 正藏' Vol. 10, 463a; 502a; 182b; 539c. Rd., p. 93, 116~l. 29; Pk., 158a, l. 3~158b, l. 1; 正藏' Vol. 10, 493ab; 531b; Vol. 9, 574b; Vol. 10, 208a; 571b. dharmatā と [地] 以外のハナ訳をたゞしは智慧と見せる。

21 Rd., p. 13, l. 27; Pk., 60a, l. 4; 正藏' Vol. 10, 462a; 501a; Vol. 9, 545b; Vol. 10, 181b; 538c. sarvajñatā は十地經には三智の一個として菩薩所得の道種智や仏所得の一切種智 (sarvathā-jñāna) に対して三乘共有の智たる一切智を示すものとせず、むしろ究極的な bodhi を指摘しているから仏自証の不共の極智たる sarvajña-jñāna のことと解せられる。

22 拙論「十地經に於ける daśa-bhūmi の意義」(印度学仏教学研究 Vol. XIX, No. 1) 参照。

23 Rd., p. 16, l. 20; Pk., 63a, l. 4; 正藏' Vol. 10, 462c; 501c; 182b; 539c. Tib. 訳は theg pa chen po'i sa (大乘の地) とある。

24 Rd., p. 3, l. 21; Pk., 51b, l. 8.

25 Rd., p. 90, l. 14; Pk., 154b, l. 3. Skt. 原典は [漸] 以外の諸本は bhūmi の語を欠へ。

26 Rd., p. 4, l. 23~p. 5, l. 4. [漸] には「…諸菩薩へ學ん十道地有り、得るに因りテ無上正覺ヲ成就ス」(458c)とある。

27 Tib. 訳は「…そのときこれら十とは諸菩薩の諸の智地である」(53a, l. 2) であり他のシナ訳諸本もこれに順する。